

山本大希先生の「学ぶ充実感のある算数の授業づくり」について

愛知教育大学 青山和裕

山本先生の実践では、児童が学ぶ充実感を感じることをねらいとして、自身で目標を設定させたり、児童同士の話し合いなどを取り入れて研究を進めている。報告された実践について、児童が自分でめあてを設定し意欲的に取り組む様子や模造紙を用いてお互いの意見を交流させる様子がまとめられている。

報告の中で気になった点としては、「考え方を広げたり、深めたり、結びつけたりすることができた」という部分である。主体的・対話的で深い学びが求められる昨今の教育において、望ましい活動であることは間違いないが、本当にそれができていたかどうかを注意深く検討してほしい。考えを広げたり深めたり結びつけたりするということは、対話的で深い学びそのものでもあるが、それが成立するためには必要なことがいくつかある。

まず子どもたちが自由に発想し、発言することができるかどうかである。算数の授業では、正解を出すことがどうしても優先されてしまい、間違った考えは淘汰されがちである。山本先生の授業でも「わかった・できた」を目標に掲げており、この雰囲気が強くなってしまうと子どもたちは「わからなければいけない」「できなくてはならない」「間違っってはいけない」と意識してしまい、自由な発想や発言はしにくくなってしまう可能性があるので注意してほしい。

その上で、相手の意見を尊重しそこから学びを広げようと思う姿勢も必要である。例えば実践で報告されている一定の面積の長方形の縦の長さとの横の長さの関係を調べる課題で当てはめてみよう。子どもたちはこの授業において積極的に関わり、反比例につながる様々な関係性を発見していたことは十分にわかる。でも子どもたちの発想は本来もっと豊かで、反比例とは関係のない発想もたくさんできるはずである。例えば、縦の長さとの横の長さを足し合わせてみると一定にはならず、それぞれ違っている。表で順にみていくと左から 13, 8, 7, 7, 7.4, 8 と続く。大きくなったり小さくなったりしているが、一番小さい値は 7 である。ではこれが最も小さいかと考えると、7 より小さい値があるかもしれないと問う発想があれば新しい数学の問題が見つかるし、追究していけば面積一定の長方形の中で辺の和を最小にするのは正方形の場合であるという発見につながる。

実際にこんなにうまく展開するわけではないが、正解しか受け付けられない授業の雰囲気ではそもそもこんな考えを出すことが憚られるだろう。自由な発想や発言が認められる雰囲気と、仮に間違っている考えであってもみんな向き合えば、その問題の解法だけでなくもっと豊かな発見ができるというのが人と人とが関わり合うことの可能性である。主体的・対話的で深い学びにはその可能性も期待されている。

山本先生にはぜひ今後も子どもたちが「考え方を広げたり、深めたり、結びつけたりする授業」に取り組んでもらいたい。